

平成 28 年 (2016 年) 度 市立札幌病院一括公表

| レベル | 件数 | | 説明 |
|----------|-------|-------|--|
| | 27 年度 | 28 年度 | |
| レベル 0 | 1848 | 2259 | <p>○事故が起こりそうな環境に前もって気づいた事例</p> <p>○実施される前に気づいた事例</p> <p>(28 年度における主な事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬剤準備時の他者とのダブルチェックで、用量の間違いに気がついた。 ・レントゲン撮影時、患者本人にフルネームを名乗ってもらったところ、同姓患者の間違いに気がついた。 |
| レベル I | 1614 | 1803 | <p>○実害がなかった事例</p> <p>(28 年度における主な事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事内容の変更連絡を受けたが、情報入力を忘れてしまい、常食を提供した。 ・患者の歩行訓練時、コルセット装着を確認せずに実施してしまった。 |
| レベル II | 440 | 529 | <p>○処置や治療を行わなかった事例</p> <p>○観察の強化、PaO_2*1 の軽度変化、確認のための検査の必要性が生じた</p> <p>(28 年度における主な事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・画像検査時に左右を間違っ撮影し、再撮影を行った。 ・未実施の検体を誤って廃棄してしまい、再採血となった。 |
| レベル IIIa | 227 | 229 | <p>○簡単な治療や処置を要した事例 (消毒、湿布、皮膚の縫合、鎮痛剤の投与等)</p> <p>(28 年度における主な事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホットパック*2 を希望され渡したが、皮膚の発赤が生じて軟膏処置を行った。 ・カーテンを閉めようとした際にバランスを崩して転倒、指の靭帯を損傷した。 |
| レベル IIIb | 7 | 13 | <p>○濃厚な処置や治療を要した事例 (PaO_2 の高度変化、人工呼吸器の装着、入院日数の延長、外来患者の入院、手術等)</p> <p>(28 年度における事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不整脈治療のため経皮的カテーテル心筋焼却術*3 施行。術中、胸部不快感あり、冠静脈洞*4 損傷を疑いエコー検査を実施。心臓周囲に液が溜まり、心タンポナーデ*5 を合併したため、緊急でドレナージ術*6 を行った。 ・膀胱全摘出と回腸導管造設*7 術後 1 日目、見当識*8 障害のため 5~20 分毎に状態観察中、看護師が訪室すると患者が尿管ステントカテーテル*9 2 本を自己抜去していた。術後 4 日目、尿の通過障害等があり、再手術となった。 ・皮下埋め込み型中心静脈ポート*10 の本体から液を注入した際、埋め込み周囲の痛みと腫れがあった。レントゲンでカテーテルが右鎖骨上で断裂し、先端が心臓近くまで迷入していたため、緊急でカテーテルを抜去した。 ・皮下埋め込み型中心静脈ポート*10 の本体から液を注入した際、埋め込み周囲の痛みと腫れがあった。レントゲンでカテーテルが右内頸静脈付近で断裂し、先端が心臓まで迷入していたため、緊急でカテーテルを抜去した。 ・開腹手術終了時、使用したラインガーゼ*11 の枚数を確認したが、その中に手術器械を固定するためのラインなしガーゼが紛れているのに気づかなかった。術後 1 日目のレントゲンでガーゼ遺残を発見し、再開腹手術を行った。 ・腎盂腎炎で入院時、CT 検査で右肺に影を認めていたが、担当医師は患者への説明と対応を行っていなかった。1 年後、他の診療科で行った CT 検査で、肺腫瘍を発見し治療を開始した。 ・左大腿骨骨折の手術後 8 日目、物音がしたため看護師が訪室すると患者がベッド横に四つん這いになっていた。右大腿骨頸部骨折を認め手術となった。 ・がん治療のため、電子カルテに登録されていた薬剤投与計画を選択したが、登録に誤りがあり、抗がん剤の過剰投与となった。後日、白血球減少で無菌室治療を要した。 ・レントゲン撮影時、検査室内で患者が仰向けの状態で倒れているのを発見。頭部打撲と腫脹があり、経過観察の目的で入院となった。 ・右腸骨動脈瘤治療のため腹壁から直接動脈瘤を穿刺し、液状の塞栓物質を注入した。その際、動脈瘤から静脈を介して肺動脈の末端まで塞栓物質が流れ |

| | | | |
|------|------|------|---|
| | | | <p>込んだため、経過観察と薬物治療を行い入院期間が延長した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 透析カテーテル植込み手術後 2 日目、透析中にカテーテル挿入部から出血があり 2 針縫合した。術後 4 日目、カテーテルから注射液が皮下にもれ、カテーテル交換が必要となった。抜いたカテーテルには小さな穴が開いていた。 看護師がトイレまで付添い歩行し、排泄後はナースコールを押すことを患者に依頼したが、患者は自分で立ち上がろうとして転倒した。当日、右肩脱臼を整復、2 日後に右肘の痛みを訴え、レントゲンで骨折を認め手術となった。 腰の手術後 34 日目、歩行器を使用中にバランスを崩して転び、左手と左臀部を打撲した。左前腕骨折と左臀部の痛みにより入院期間が延長となった。 <p>(主な再発防止の取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"> 心臓カテーテル電極を深く挿入する場合、カテーテルの位置・電位を頻回に把握する。 手術後に危険行動がある場合は、複数の看護師で安全策を検討する。 断裂しにくい皮下埋め込み型中心静脈ポートを医療材料として採用する。 手術時、清潔区域にはラインガーゼのみを出す。 画像検査は必ず診断レポートを依頼する。 液状塞栓物質注入の場合、動静脈瘻が存在する可能性を考慮して注入する。 リハビリテーション科と転倒防止に関して連携を強化する。 |
| レベルⅣ | 1 | 2 | <p>○障害が残った事例</p> <p>(28 年度における事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> 腰椎手術の際に腰椎の硬膜を損傷した。損傷した硬膜周囲から髄液が漏れないように早めに創部のドレーンを抜去した。後日、創部周囲に血腫ができて、排尿障害となり、定期的な導尿^{*12}が必要となった。 大腸と精神の病気で入院中、発熱や嘔吐があり、血圧や意識が低下した。心肺停止となったため、救命処置を行ったが低酸素性脳症に至った。 <p>(主な再発防止の取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"> 多椎間の手術の場合は、ドレーン留置期間を長めにする。 |
| レベルⅤ | 5 | 3 | <p>○死亡となった事例 (原疾患の自然経過によるものを除く)</p> <p>(28 年度における事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> 路上で意識がない状態で倒れているのを発見され救急搬送。救急車内で医師が気管内挿管を施行した。病院到着後、気管内チューブの位置異常を認め修正した。入院 7 日後、低酸素性脳症に至り死亡。 腹腔鏡下手術の際に静脈を損傷したため、開腹手術に変更して損傷部の修復を行った。術後、修復部から再出血をきたし再手術を行ったが、血を固める機能が低下し止血困難な状況となり、出血による多臓器不全で死亡。 心臓手術を施行、術後約 13 時間後に出血性ショックで開胸止血術を行った。止血術後 2 日目に高度脳浮腫を認め、10 日目に低酸素性脳症で死亡。 <p>(主な再発防止の取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"> 救急車内ではモニター器械を活用し、常時、患者の肺に空気が入っているかを確認する。 手術執刀時は予定出血量なども含めた確認を行い、より早期に危険回避する。 |
| その他 | 2 | 1 | <p>○対象が患者以外のもの、レベル判定不可能なもの等</p> <p>(28 年度における事例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ベッド上で清拭介助とシーツ交換を行った後、外した腹帯を紛失した。 <p>(主な再発防止の取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"> ケアの際は、患者の私物を分別して回収を強化する。 |
| 総数 | 4144 | 4839 | |

*1 バイタルサイン (生命徴候) : 脈拍、呼吸、体温、血圧などのこと。

*2 ホットパック : 皮膚の上から局所を温める際に用いられるもので、通常 80 度の恒温槽等で温めて使用する。

*3 経皮的カテーテル心筋焼却術 : カテーテルという細い管を静脈から心臓内へ挿入し、不整脈を引き起こす異常な心臓内の局所を焼灼して、正常なリズムを取り戻す手術方法のこと。

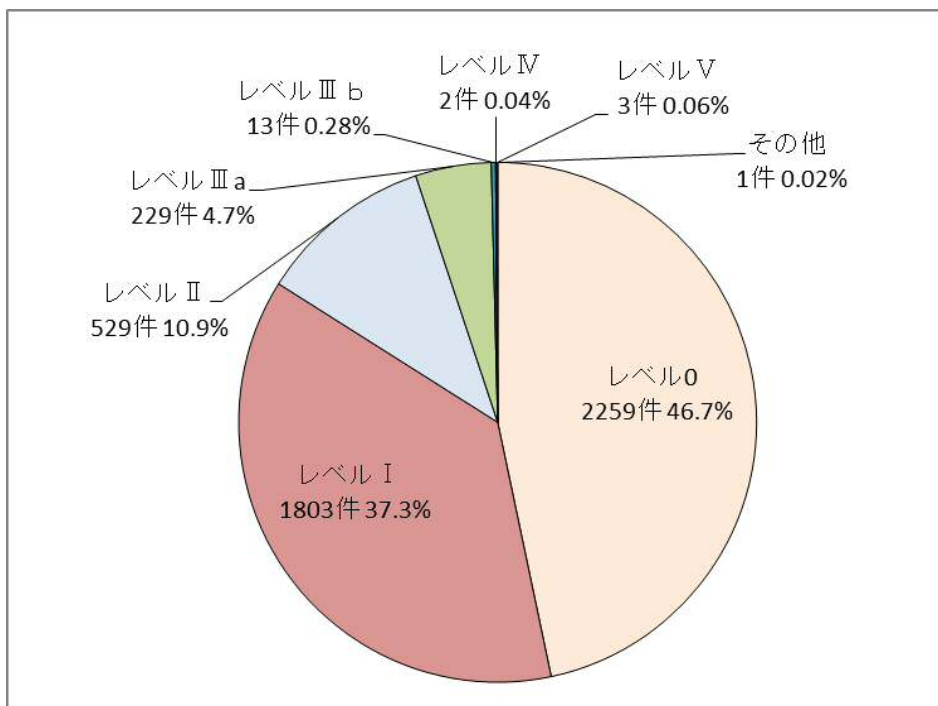
*4 冠静脈洞 : 心臓周囲の静脈の出口で、右心房に位置している。

- *⁵心タンポナーデ：心臓の表面を包む2層の心膜の間に液体が大量に貯留し、心臓の拍動が阻害された状態のこと。
- *⁶ドレナージ術：組織腔にたまった浸出液や血液を体外に排出するために、管を挿入する手技のこと。
- *⁷回腸導管：膀胱全摘手術時に行う尿路変更術の一つで、小腸の回腸を一部切断し、一方に腎臓から続く尿管を埋め込み、もう一方の切断面を下腹部の表面から出して人工膀胱(ストーマ)を作り、ここから尿を排泄する。
- *⁸見当識：現在の年月や時刻、場所など基本的な状況把握のこと。
- *⁹尿管ステントカテーテル：回腸導管術の場合、人工膀胱(ストーマ)から尿管を経由し腎臓に留置されるカテーテルのこと。
- *¹⁰皮下埋め込み型中心静脈ポート：中心静脈カテーテルの一種で薬剤投与に用いられる。100円硬貨程度の大きさの本体とカテーテルにより構成され、通常、鎖骨の下の血管からカテーテルを挿入し、前胸部の皮下に本体を埋め込む。カテーテルの先端は、心臓近くの太い静脈に留置される。
- *¹¹ラインガーゼ：X線を通さない細い糸が縫い付けてあるガーゼで手術部位に使用される。レントゲン撮影により、ガーゼの体内遺残の有無を確認することができる。
- *¹²導尿：膀胱に溜まった尿を時間ごとに尿道口からカテーテル(管)を挿入して排出する方法のこと。

平成 28 年度に発生した医療事故等のレベル別及び種類別割合

(1) レベル別割合

【図 1】



(2) 医療事故等の種類別割合

【図 2】

